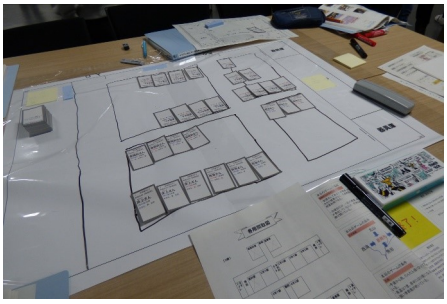
平成２８年度
日本災害医療学生研修

Japan disaster medical hands-on training for students

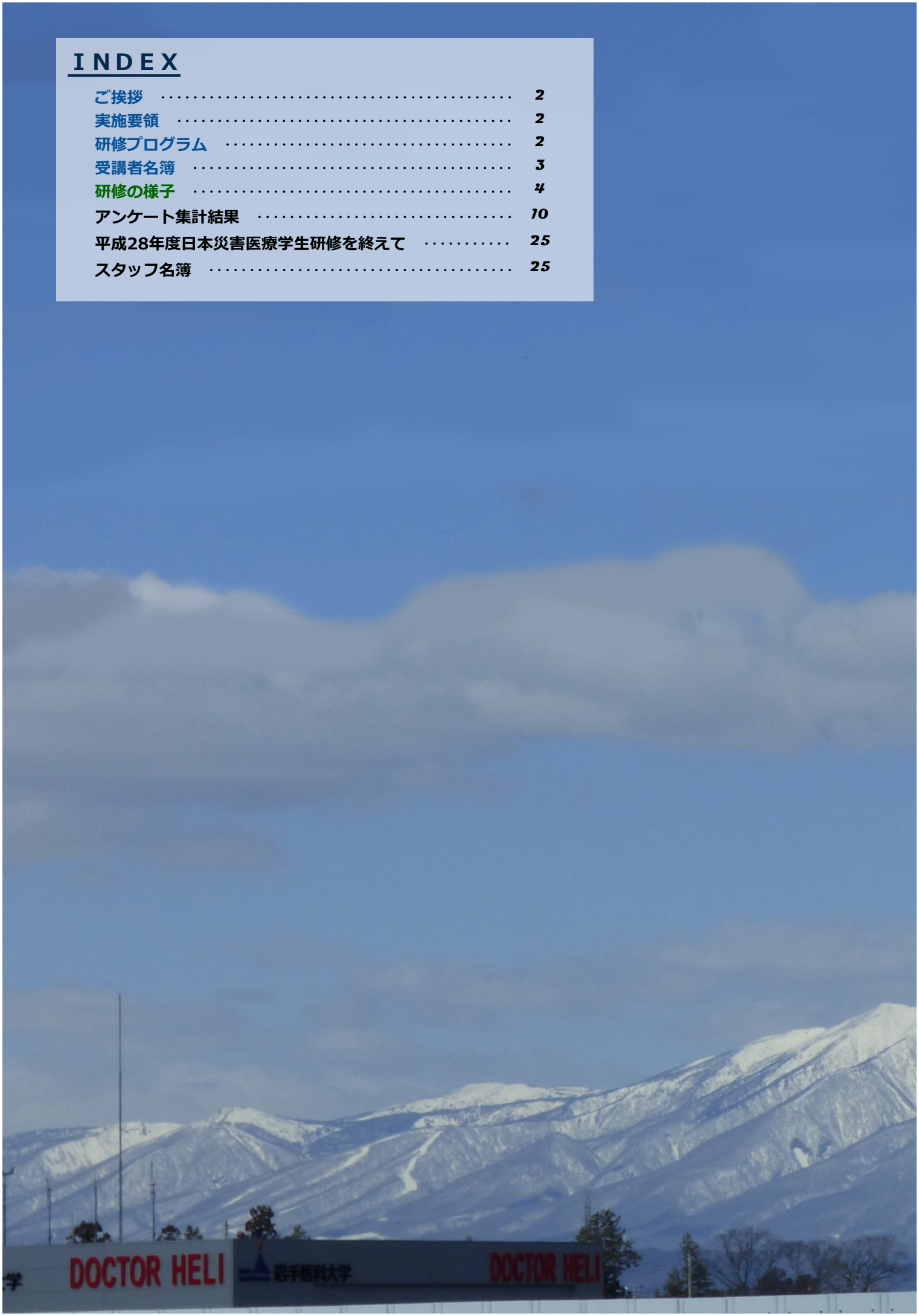
2017.3.11



岩手医科大学
Iwate Medical University
災害時地域医療支援教育センター
Center for research and training on community health services during disaster

ＩＮＤＥＸ

ご挨拶 …… 2
実施要領 …… 2
研修プログラム …… 2
受講者名簿 …… 3
研修の様子 …… 4
アンケート集計結果 …… 10
平成28年度日本災害医療学生研修を終えて …… 25
スタッフ名簿 …… 25



ご挨拶

日本災害医療学生研修にお集まりいただきありがとうございます。平成26年度より全国の医学生・医療系学生を対象に災害医療について学ぶこの研修会を毎年1回開催しておりますが、今回で第3回となりました。24名の学生の皆さんにご参加いただき、誠にありがとうございます。

今日で東日本大震災発災よりちょうど6年の月日が経過しました。その後もいくつもの大きな災害が発生しており、今年だけでも熊本地震や鳥取地震、台風10号による岩手県沿岸部の豪雨災害などが発災しています。

この研修は、東日本大震災が発災した時の様々な思いを風化させないようにという思いと、日本各地で頻発する局地災害、また今後近い将来必ず起きるであろう大規模災害に対して、皆さんのように医療人を目指している若い方々に災害医療に興味を持っていただきたいという思いで開催しております。

今回の研修は独立行政法人国立病院機構釜石病院のご協力を頂き、院長の土肥先生には東日本大震災の当時の貴重な体験談についてお話しいただくことになっております。

研修は、スケジュール的にかなりタイトで盛り沢山の内容ですが、医師、看護師、作業療法士を目指している学生の皆さんに、ぜひ災害医療について学んでいただき、また他職種間の交流も深めていただきたいと思います。

岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター長
救急･災害･総合医学講座災害医学分野 教授　眞瀬智彦

実施要領

1.目的

この研修会は医学・医療系学生の立場から、災害医療概論の講義や、トリアージ訓練等の実習を通じて、災害医療に関する基礎知識を習得し、災害医療に対する考え方を学びます。また、卒業後に各医療機関へ就職した後も、災害医療に興味を持っていただけるような研修内容とし、今後の災害医療を担う人材育成を目指します。

2．開催日と開催場所

平成29年3月11日（土）9:30~16:50　　岩手医科大学矢巾キャンパス
災害時地域医療支援教育センター

3．研修対象と受講定員

全国の医学・医療系学生　30名
（学年不問。申込者多数の場合は地域等を考慮し選考とさせていただきます。）

4．研修内容

■3月11日（土）　9:30~16:50
開催場所：災害時地域医療支援教育センター（岩手医科大学矢巾キャンパス）
内　　容：講演　講師：土肥　守（国立病院機構釜石病院院長）
講義　災害医療概論、トリアージについて　他
実習　トリアージ訓練、情報通信訓練、がれきの下の医療　他

5．参加費

無料　但し、下記の費用は自己負担になります。
◆各自出発地⇔岩手医科大学災害時地域医療支援教育センターの交通費及び宿泊費
◆1日目の昼食は各自でご用意ください

6．主催

岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター

7．共催

独立行政法人国立病院機構釜石病院

8．問い合わせ先

岩手医科大学矢巾キャンパス 災害時地域医療支援教育センター事務室
住所：〒028-3694　岩手県紫波郡矢巾町西徳田2-1-1
電話番号：019-651-5111（内線　5563、5564）
FAX番号：019-611-0876
E-Mailアドレス：saigai@j.iwate-med.ac.jp

研修プログラム

9:00~9:30	会場受付
9:30~9:40	**開会の挨拶**
9:40~10:20	**講義｜災害医療概論** 講師｜岩手医科大学救急･災害･総合医学講座災害医学分野 教授　眞瀬 智彦
10:20~10:50	**講演｜あなたも被災者として災害医療に関わるかもしれない** **～東日本大震災を経験して～** 講師｜独立行政法人国立病院機構釜石病院 院長　土肥 守
10:50~11:05	**休憩**
11:05~12:15	**シミュレーション｜避難所運営（ＨＵＧ）** 講師｜岩手医科大学救急･災害･総合医学講座災害医学分野 助教　藤原 弘之
12:15~13:10	**昼食**
13:10～13:55	**講義･演習｜トリアージ** 講師｜岩手医科大学臨床遺伝学科 講師　徳富 智明
13:55～14:40	**講義･演習｜情報通信訓練** 講師｜岩手医科大学救急･災害･総合医学講座災害医学分野 助教　藤原 弘之
14:40～14:50	**黙祷**
14:50～16:40	**演習｜がれきの下の医療** 講師｜岩手医科大学救急･災害･総合医学講座災害医学分野 教授　眞瀬 智彦 **講義｜災害時におけるメンタルヘルスケア** 講師｜独立行政法人国立病院機構災害医療センター臨床研究部災害医療管理係　千島 佳也子
16:40～16:50	**修了式**

氏名		学校名	学部・学科名	学年
宮本　将秀	ミヤモト　マサヒデ	筑波大学	医学群医学類	3年
豊嶋　萌	トヨシマ　モエ	岩手医科大学	医学部	3年
石川　滉	イシカワ　コウ	岩手医科大学	医学部	4年
今野　恵	コンノ　メグミ	東北医科薬科大学	薬学部・薬学科	6年
岩本　佳幸	イワモト　ヨシユキ	岩手医科大学	薬学部薬学科	3年
伊藤　実奈	イトウ　ミナ	岩手県立大学	看護学部看護学科	3年
志田　美波	シダ　ミナミ	岩手県立大学	看護学部	3年
岩渕　麻衣	イワブチ　マイ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
上原子　愛菜	カミハラコ　アイナ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
狩原　真広	カリハラ　マサヒロ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
川村　一生	カワムラ　カズキ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
久保　都磨作	クボ　ツバサ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
佐々木　綾香	ササキ　アヤカ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
高倉　麻香	タカクラ　アサカ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
多田　滉平	タダ　コウヘイ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
立花　蓮太	タチバナ　レンタ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
田村　茉由子	タムラ　マユコ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
沼﨑　翔	ヌマザキ　カケル	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
古里　華蓮	フルサト　カレン	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
柳　龍太朗	ヤナギ　リュウタロウ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
山形　幸奈	ヤマガタ　ユキナ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
山本　裕貴	ヤマモト　ユウキ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
菊池　凱天	キクチ　ヨシタカ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年
滝澤　寛	タキサワ　ヒロシ	岩手リハビリテーション学院	作業療法学科	1年

災害医療概論

岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター長
救急･災害･総合医学講座災害医学分野　教授

眞瀬 智彦

災害医療の基本についての説明と、岩手県が進めてきた災害医療の取組、東日本大震災時に医療機関が行った対応等について、災害時地域医療支援教育センター長の眞瀬先生よりご講義頂きました。

災害医療と救急医療は何が違うのか？阪神淡路大震災の経験を踏まえて発展した災害医療の成り立ち、仕組みとはどのようなものか？災害対応の原則CSCATTTとは？などの災害医療の概論をご説明頂きました。

東日本大震災では、大津波により岩手県沿岸部が壊滅的な被害を受け、人口の1割近くの死者・行方不明者が発生した自治体もありました。行政施設や医療施設も被災し、機能のほとんどを失い、早急に病院避難をしなければならない状況に陥った病院もありました。

消防・警察・自衛隊・行政と連携しながら、被災地内で活動する医療人たちは、医療の立て直しを図り、また、いわて災害医療支援ネットワークを立ち上げ、長期化する避難所生活を余儀なくされた被災者の健康維持やサポートをする仕組みづくりを行いました。当時の状況の詳細をご説明頂きました。

あなたも被災者として災害医療に関わるかもしれない　～東日本大震災を経験して～

独立行政法人国立病院機構釜石病院 院長

土肥 守

国立病院機構釜石病院 院長の土肥先生より、東日本大震災発災当時から現在に至るまでの体験や医療人として取り組んだことなどについてご紹介いただきました。

大津波により市街地を含む沿岸地区が甚大な被害を被った釜石市。国立病院機構釜石病院は市街地から若干内陸寄りの山間地に位置していたため、津波の直接的な被害は受けませんでしたが、大きな揺れのため、ライフラインは途絶。電話や携帯電話などの通信機器も使用不可となり、一時孤立状態となりました。

国立病院機構釜石病院は障害者病棟と重症心身障害児病棟を持つ慢性期の患者さんを主にケアする病院でしたが、災害拠点病院である県立釜石病院は病棟倒壊の恐れがあり、釜石のぞみ病院は半壊、隣町の県立大槌病院は全壊という状況で、自院の医療体制の維持に加え、釜石医療圏内の他医療機関のフォローも行わなければならない状況でした。

行政や消防・警察・自衛隊などの機関と連携し、この状況を打破し、医療体制を立て直すために奔走された様子もご紹介いただきました。

最後に、今後起こりうる災害に対して、日頃からどのような準備が必要なのかについてのアドバイスを頂きました。

シミュレーション｜避難所運営（ＨＵＧ）

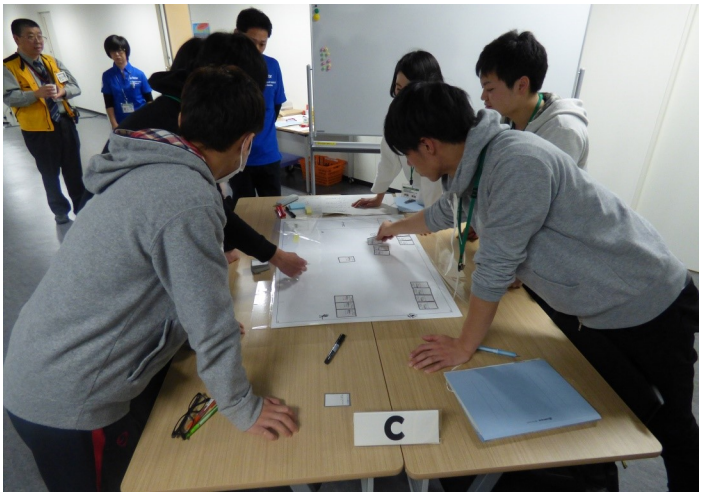
岩手医科大学
救急･災害･総合医学講座災害医学分野　助教
藤原 弘之

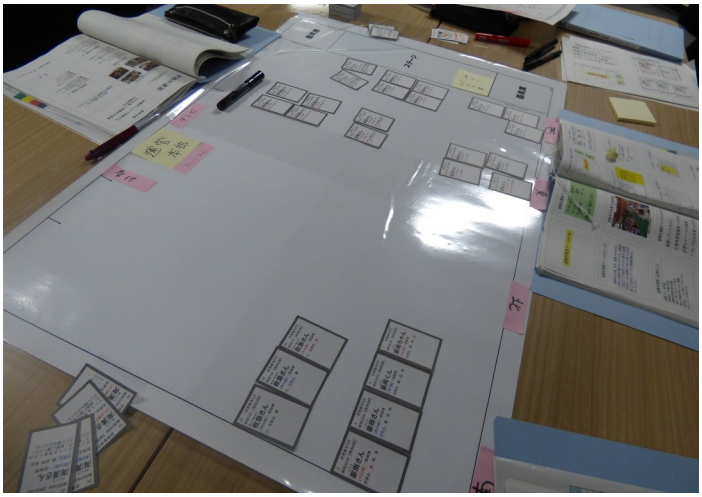
東日本大震災では、長期化する避難所生活による被災者の健康維持・管理が課題としてクローズアップされ、感染症の抑制のための公衆衛生の重要性、静脈血栓塞栓症（エコノミークラス症候群）の対応、慢性疾患患者への対応、要介護者などの災害弱者への対応など、さまざまな問題が表面化しました。

避難所の管理・運営は基本的に自治体主導で行いますが、医療従事者として災害時の避難所の管理・運営がどのように行われているかについて理解を深めておくことも重要です。

ここでは静岡県が開発した避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）を用いて、避難所を運営する机上シミュレーションを行いました。4つのグループに分かれ、小学校の体育館や校舎の地図の上に、次々と押し寄せて来る様々な事情を抱えた被災者を、ディスカッションしながら配置していきました。

また、炊き出しの準備や仮設トイレの設置、被災者からのクレーム対応など、避難所で起こり得るイベント、トラブルなどにどのように対応していくべきかについても、グループ毎にディスカッションしました。





トリアージ

岩手医科大学
臨床遺伝学科　講師　　徳富 智明

災害発生時には多数の傷病者が発生します。充分な医療資源が得られない中、多数の患者が発生するという不均衡が生じた状況で、速やかに診療と搬送を行い、少しでも多くの命を救うためには、医療資源の分配順位、すなわち治療の順位を速やかに決める必要があります。このとき用いられるのがトリアージです。

ここでは、岩手医科大学臨床遺伝学科講師の徳富先生より、ＳＴＡＲＴ法とＰＡＴ法の2種類のトリアージについて説明していただき、患者カードを用いたトリアージや、模擬患者の状態を確認しながらトリアージタッグに記載を行うトレーニングを行いました。

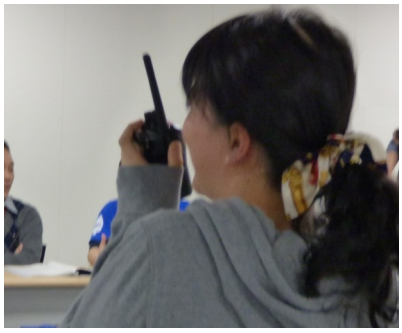
情報通信訓練

岩手医科大学
救急･災害･総合医学講座災害医学分野　助教
藤原 弘之

災害現場での情報通信のツールとして、トランシーバー、衛星携帯電話、広域災害救急医療情報システム（ＥＭＩＳ）の紹介と、実際にトランシーバーで通信を行う演習を行いました。

災害電場では停電などの影響で通信インフラが使用不可能となり、他との情報のやり取りができない状態に陥りがちです。正しい情報をタイムリーに収集し発信できなければ、安全かつ有効な活動を進めることができません。

ここでは、トランシーバーを実際に使って相手との通信を行う体験をしていただきました。



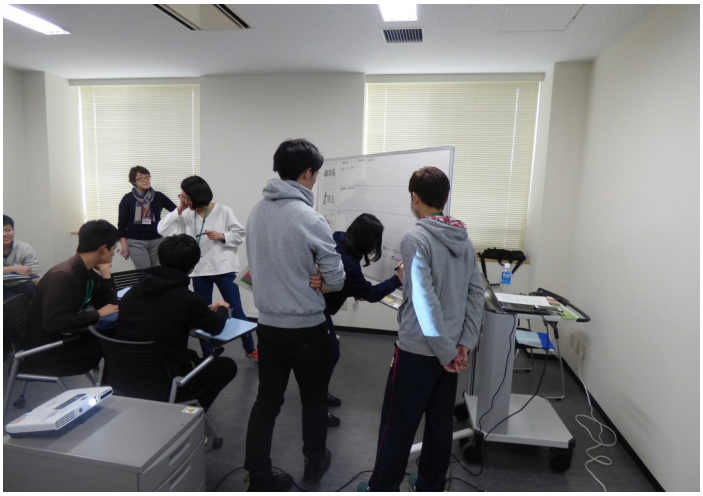
災害時におけるメンタルヘルスケア

独立行政法人国立病院機構災害医療センター
臨床研究部災害医療管理係

千島 佳也子

災害時における被災された方とのコミュニケーション方法としての心理的応急処置（サイコロジカル・ファースト・エイド：ＰＦＡ）について、国立病院機構災害医療センターの千島先生よりご説明頂きました。

被災された方の中には、深刻な危機的出来事に見舞われることで過大な心的ストレスを受け、精神的ダメージを負われる場合があります。被災地ではそのような方々と触れ合う機会やサポートを行う機会がありますが、そのようなときに、どのようなことを心掛け、相手の気持ちを落ち着かせながら手助けをすることができるのか。避難所などで患者の方と向き合うシーンのロールプレイなども交えながら、グループ毎にどのような対応が必要なのかについてディスカッションを行いました。



がれきの下の医療

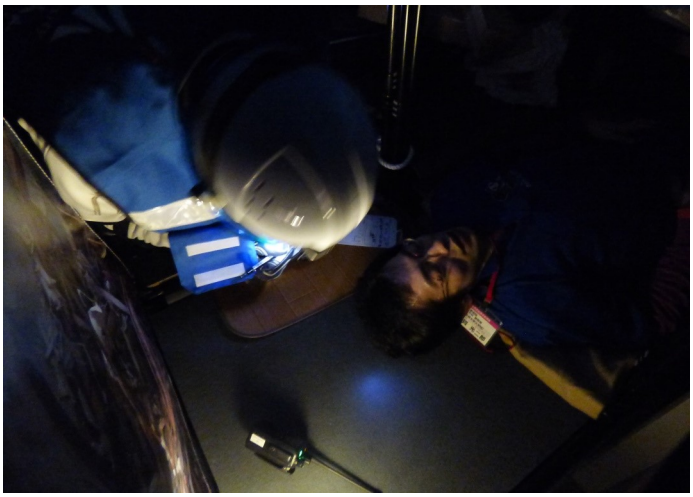
岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター長
救急･災害･総合医学講座災害医学分野　教授

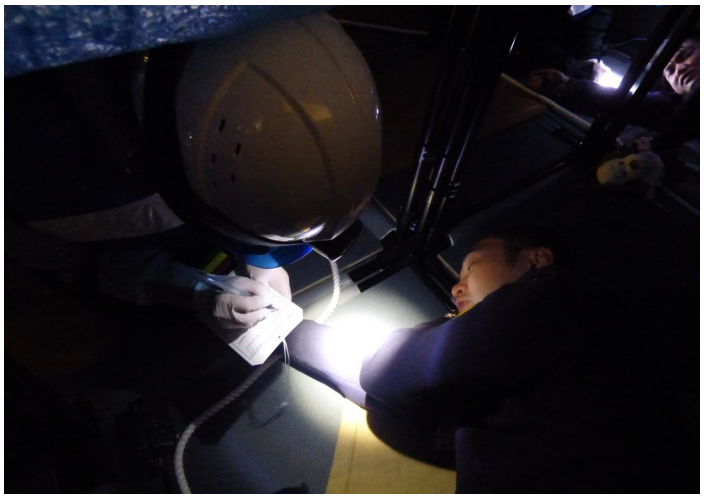
眞瀬 智彦

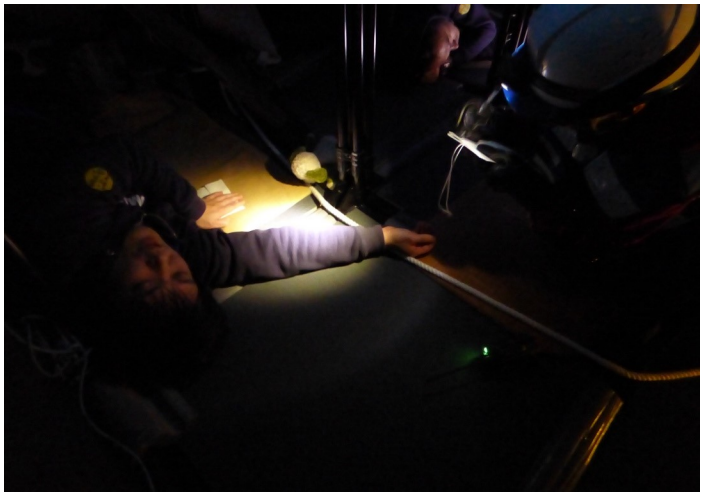
阪神淡路大震災では、倒壊した建物に長時間挟まれることで発症する圧挫症候群（クラッシュ症候群）による死亡例が多かったという特徴がありました。クラッシュ症候群は救出活動中からの医療活動が有効ですが、がれきの下の医療行為は危険と困難を伴います。ここでは、がれきの下の医療を疑似体験することで、安全への意識向上、自分の身は自分で守らなければならないということを実感していただくために、当センター内に常設しているＣＳＭ訓練用施設を用いたシミュレーションを行いました。

列車の脱線転覆事故により沿線の住居が倒壊。その中に数名の要救助者が取り残されており、消防隊による懸命の救助活動が進められ、要救助者の発見・アクセスルートの確保はできたものの、救出までにはまだ数時間が必要という想定でした。受講者の皆さんは現場に到着した医療チームとして、要救助者に接触。状態を観察しトランシーバーを用いて活動本部に状況報告するというミッションを行ってもらいました。

暗く狭いがれきの中に潜り込み、窮屈な状態で要救助者の状態観察や会話をすることの難しさを体感していただけたと思います。



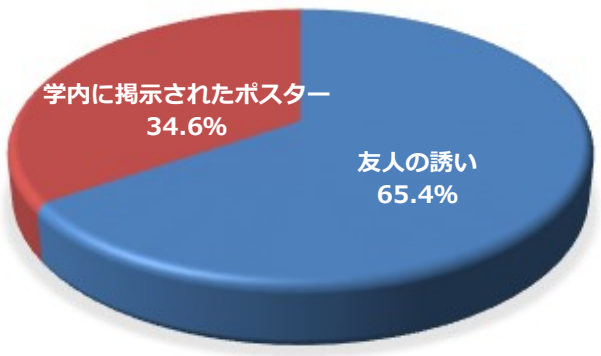




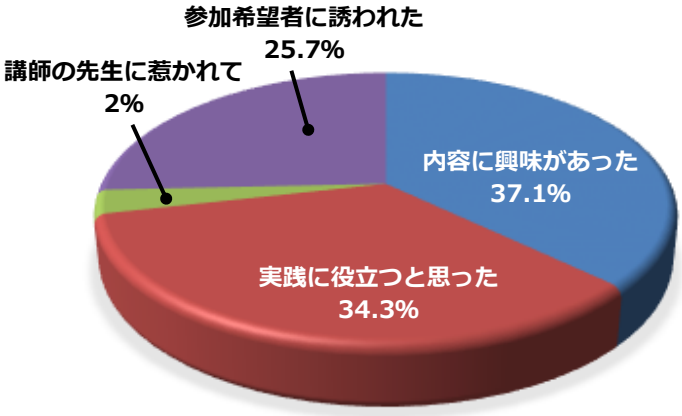
アンケート集計結果

【アンケート回答者数　28名】

1．今回の研修について、どのようにして知りましたか？（複数回答可）

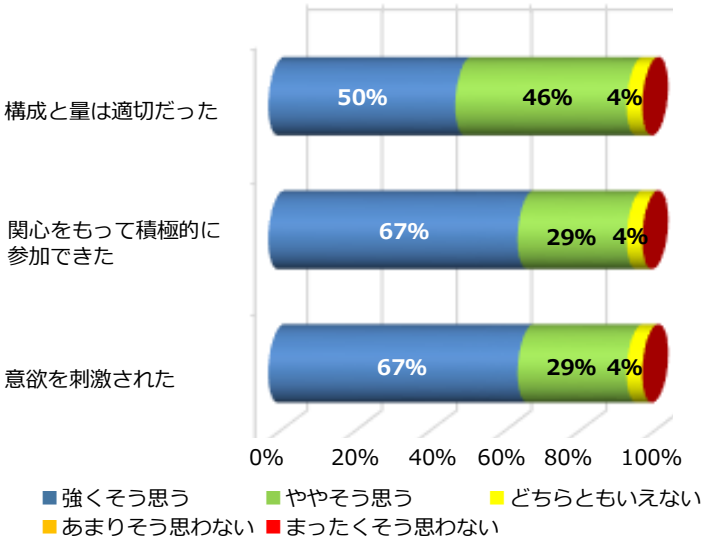


2．受講した動機についてあてはまるものすべてに☑をしてください。（複数回答可）

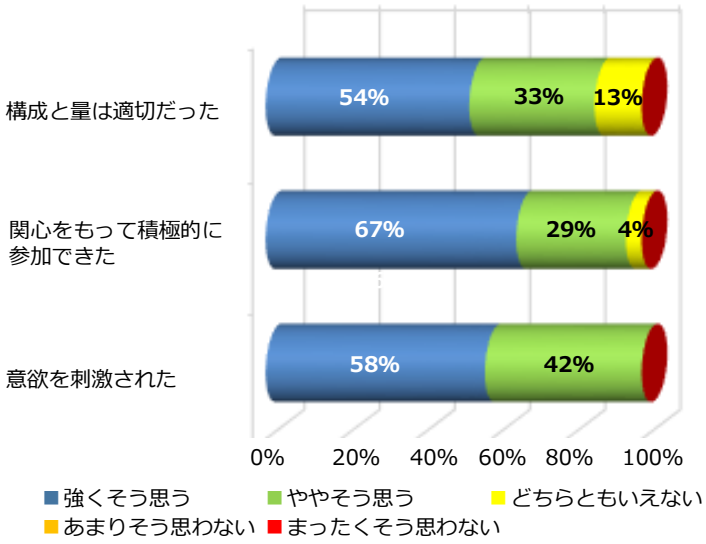


3．研修それぞれの感想について、以下の選択肢からお選びください。

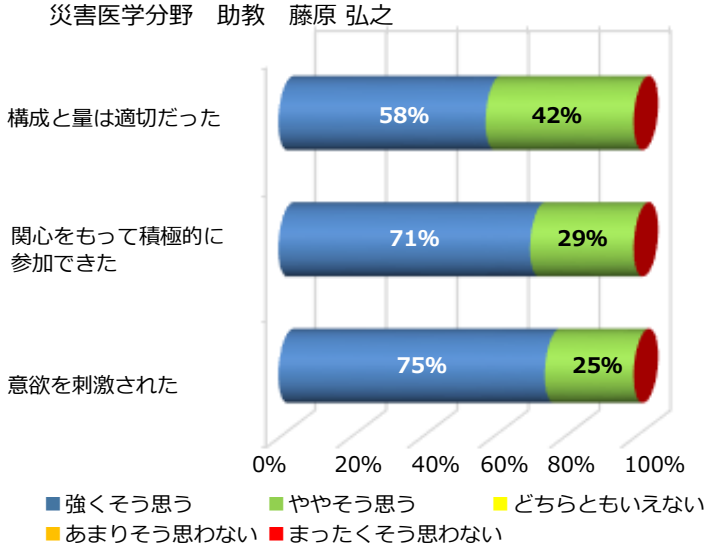
■ 講義｜災害医療概論
岩手医科大学救急･災害･総合医学講座
災害医学分野　教授　眞瀬 智彦



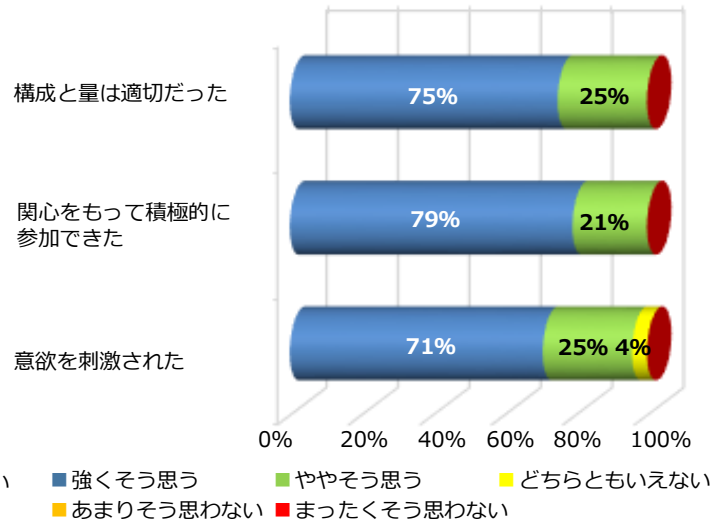
■ 講演｜あなたも被災者として災害医療に関わるかもしれない
～東日本大震災を経験して～
独立行政法人国立病院機構釜石病院　院長　土肥 守



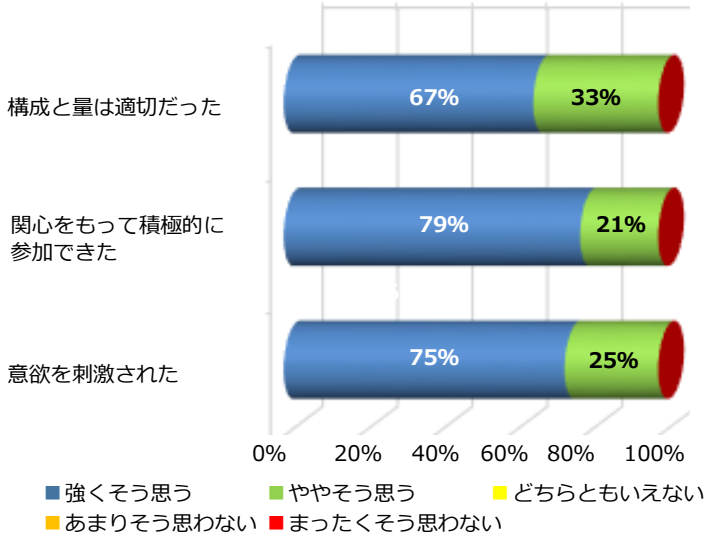
■ 演習｜避難所運営（ＨＵＧ）
岩手医科大学救急･災害･総合医学講座
災害医学分野　助教　藤原 弘之



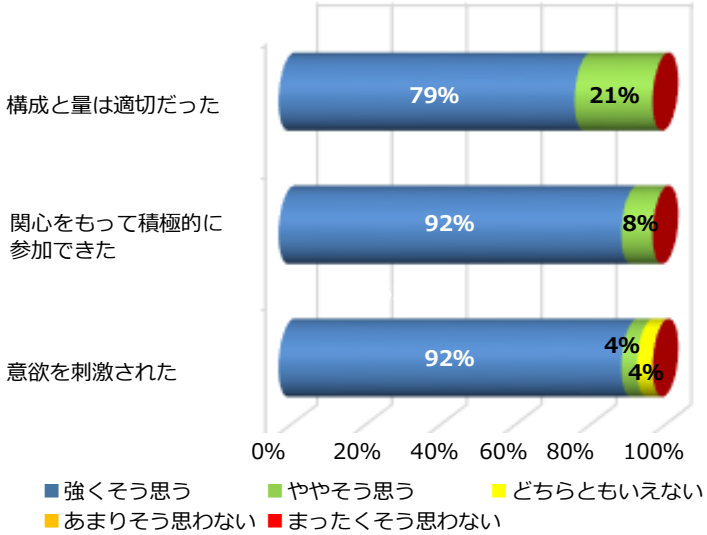
■ 実習｜トリアージ
岩手医科大学臨床遺伝学科　講師　徳富 智明



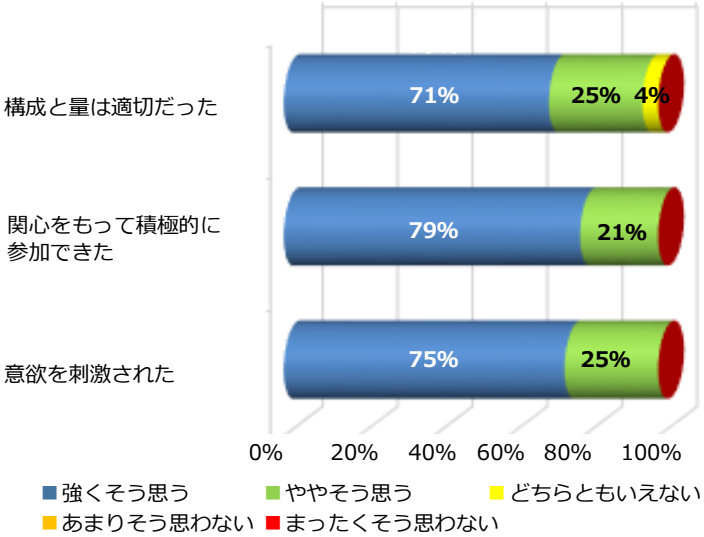
■ 講義・演習｜情報通信訓練
岩手医科大学救急･災害･総合医学講座
災害医学分野　助教　藤原 弘之



■ 演習｜がれきの下の医療
岩手医科大学救急･災害･総合医学講座
災害医学分野　教授　眞瀬 智彦



■ 講義｜災害時におけるメンタルヘルスケア
独立行政法人国立病院機構災害医療センター
臨床研究部災害医療管理係　千島 佳也子



4．今日の研修全体を通しての感想をご記入願います。改善してほしいこと、今後、実施してほしい研修内容などをご自由にご記入ください。

- 今までの学校の授業等でも、割と災害についてやトリアージについては習ってきたのですが、がれきの実習の時に、いかに実践できないかということが判りました。災害医療に携わっていきたいので、よろしくお願いいたします。
- 災害医療の概論については既に学んだことのある内容であった。このような研修に参加しようという学生は、ある程度意欲と知識を持ってきていると思うため、より発展したものを学ぶ時間にして欲しいと思った。コミュニケーションスキルについても、もっと演習できる時間が欲しいと思った。避難所運営についても、もっと時間が欲しいと思った。感染症対策などは、発災直後、特に重要だと思うので学びたい。
- 災害医療とは何かを、多くの実習を通して学ぶことができ、大変貴重な経験をすることができました。将来薬剤師として、災害の時に必ず動くことができる医療従事者になれるよう日々勉強していきたいと思います。
- 私は被災者でありながら被災地のことを全く知らず、もやもやしていましたが、全部知ることはできなくとも、一歩前に踏み出すことができたかなと思います。それに加え、自分の無力さや勉強不足であることを強く実感し、これでは助けたい人も助けられないと思いました。本当に良い日になりました。ありがとうございました。
- 実習と講義がバランスよく構成されてあって、いい研修会だったと思います。
- 学内で迷子になった。会場の案内板が欲しい。DMATに薬剤師は必須ではないが、やはりそうだと思った。バイタルを取ったり、患者を観察する方法を一切知らず、Dr.や看護師には及ばないと思った。このような悔しい思いを就職する前に味わえて良かったし、もっと学んでいこうと思えた。
- 時間配分はとても良かったと思います。

アンケート集計結果

- 今回の研修を通してトランシーバーの使い方からトリアージの仕方など、様々なことを学ぶことができました。将来、災害に遭遇することは無いと思いますが、もし、そのような事態が起きた時に、しっかり対応できるように覚えておきたいです。
- トランシーバーの使い方が解ってよかった。
- 自分の知らなかった災害の事実や対応方法を知ることが出来て良かった。貴重な体験でとてもタメになった。今後に活かしていきたいと思う。
- 講義と実習を組み合わせて、とても内容の濃い研修を受けることができて良かったです。実際に自分が動くことで、災害に慌てることなく支援することができると思うので、普段から対策したいと思いました。またスライドもとても見やすく、興味を持つことができました。被災したことがあるけれど、その裏でどのような医療を行っているか、流れなどを掴むことができたので良かったです。
- 今回の研修で、具体的な災害医療について知ることができて良かった。また「がれきの下の医療」などの貴重な体験ができてとても勉強になった。
- こういった研修に参加するのは初めてだったが、楽しく興味を持って参加することができた。がれきの下の医療は暗く狭く怖かったが、とても貴重な経験ができ、良かった。
- 思っていた内容と異なり、楽しく受講することができた。普段体験できないような事を体験できて、とても貴重だと思った。
- 非常に有意義な1日になりました。既に知っていることもある一方で、初めて耳にすることも多くありました。システムの面においては、「EMIS」を初めて知り、大変興味深く感じました。トランシーバーの使用法、トリアージの方法についても、普段の授業では学ぶことができないものだったので良かったです。ありがとうございました。
- がれきの下の医療の実習を、できるまで複数回やりたいです。
- 非常に参考になりました。
- 午前に基本的な知識について学び、午後に実践が行われ、とても実用的で良かったです。もう少し休む時間を入れて欲しかったです。
- 避難所運営の講義のHUGをもっと長くしたかった。
- 演習の「がれきの下の医療」がとても難しかった。災害医療について知るきっかけになり、勉強になりました。
- 初めてこのような研修に参加してみて、とても良い経験ができました。演習の「がれきの下の医療」はとても難しかったです。この演習を将来役に立つことがあると思うので覚えておきたいです。
- 満足できました。
- 災害で実際に行った行動の動画等があったら、それを講義でも紹介してほしい。

平成28年度 日本災害医療学生研修を終えて

皆さん研修ご苦労様でした。日本災害医療学生研修を終えて、一言申し上げます。

今回の研修では岩手県内外の24名の学生の皆さんにご参加いただき、非常にタイトなスケジュールではありましたが無事にすべてのプログラムを終えることができました。ご協力いただいた独立行政法人国立病院機構釜石病院に、まずは感謝申し上げます。

東日本大震災発生から6年が経過した今日、我々も特別な思いでこの研修を開催しました。冒頭でも述べましたとおり東日本大震災を風化させないという思いと、今後医療の道を目指す皆さんに、災害医療の基本となることを学んでいただき、災害が起きたとき少しでも役に立ててほしいという思いから実施しております。今後の医療を支えていくであろう皆さんが、この研修を通して少しでも災害医療の知識を習得していただけたのなら幸いです。そして、今後必ず起こり得る災害時に対応できる医療人になっていただきたいと思います。

最後にご講演頂いた講師の皆様、研修会にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

災害時地域医療支援教育センター長
眞瀬 智彦

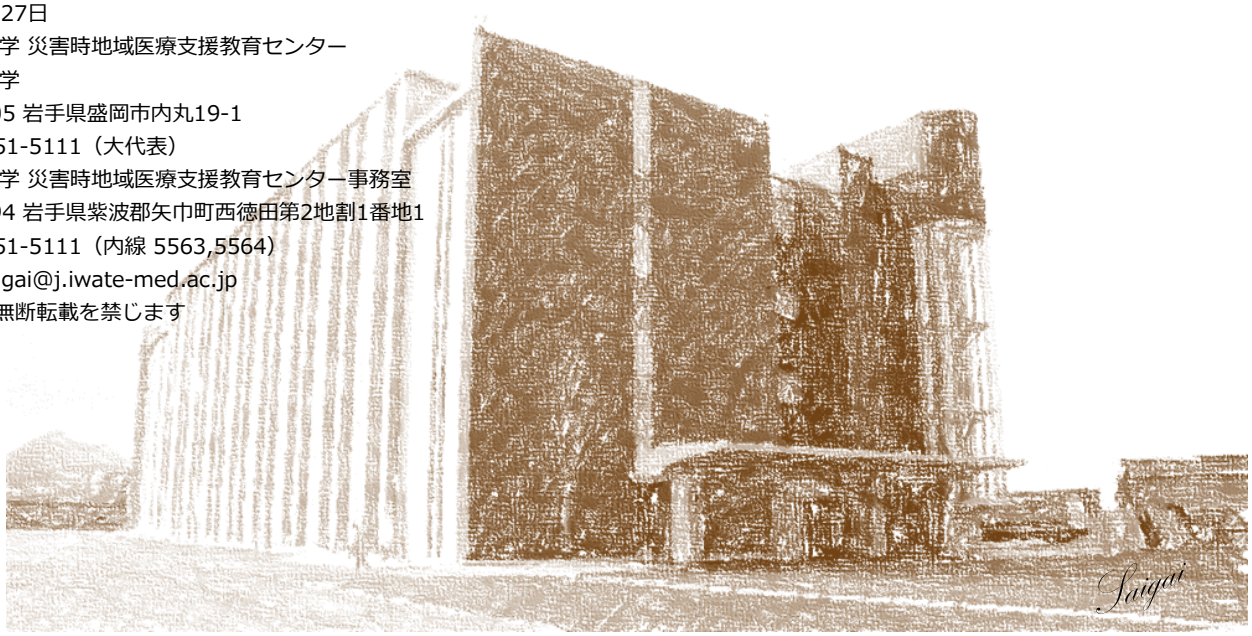
スタッフ名簿

講師一覧

氏名		所属・職名
土肥　守	ドイ　マモル	独立行政法人国立病院機構釜石病院　院長
千島　佳也子	チシマ　カヤコ	独立行政法人国立病院機構災害医療センター臨床研究部災害医療管理係
眞瀬　智彦	マセ　トモヒコ	岩手医科大学救急･災害･総合医学講座災害医学分野　教授
藤原　弘之	フジワラ　ヒロユキ	岩手医科大学救急･災害･総合医学講座災害医学分野　助教
徳富　智明	トクトミ　トモハル	岩手医科大学臨床遺伝学科　講師
藤田　友嗣	フジタ　ユウジ	岩手医科大学救急･災害･総合医学講座救急医学分野　助教
金子　拓	カネコ　タク	岩手医科大学附属病院高度救命救急センター　看護師
阿部　靖	アベ　ヤスシ	盛岡友愛病院　事務職員
志賀　光二郎	シガ　コウジロウ	盛岡友愛病院呼吸器外科　副部長　岩手医科大学大学院生

スタッフ一覧

氏名		所属・職名
山口　順之	ヤマグチ　ヨシユキ	岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務室 室長
山本　英子	ヤマモト　エイコ	岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務室
蒲澤　優	ガマサワ　マサル	岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務室
奥野　史寛	オクノ　フミヒロ	岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務室
御堂地　愉里子	ミドウチ　ユリコ	岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務室
伊藤　友香子	イトウ　ユカコ	岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務室

平成28年度 日本災害医療学生研修 報告書

発行日　　：2017年3月27日
編集／著者：岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター
発行所　　：岩手医科大学
〒020-8505 岩手県盛岡市内丸19-1
Tel.019-651-5111（大代表）
連絡先　　：岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター事務室
〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町西徳田第2地割1番地1
Tel.019-651-5111（内線 5563,5564）
E-mail. saigai@j.iwate-med.ac.jp
※無断転載を禁じます